

國學院大學學術情報リポジトリ

「梅に鶯」の成立と変容：日中比較の角度から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 雯 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001551

「梅に鶯」の成立と変容

——日中比較の角度から——

Study on The Origin and Development of The Combination of “Plum Blossom and Oriole”

韓 雯

要旨

本論文は、日本の文学、文化で活躍している「梅にウグイス」という取り合わせを対象として考察して行きたい。

日本人の美意識に深く根づいた「梅にウグイス」の取り合わせは、漢詩から取り入れたとされるが、和歌によって定着して以来、日本の代表的な景物の取り合わせとして、人々に親しまれてきた。しかも、文学から民俗へ、貴族社会から民間へというルートを経て伝わり、変容してきた。

一方、漢詩には花と鳥を組み合わせる伝統はあるが、文学において梅とウグイスを結びつける例はごくわずかである。ただし、民間においては「梅にかササギ」という吉祥を願う取り合わせが存在する。

本論は、日本の「梅にウグイス」の成立、発展、変容の過程、及び中国側との比較研究を中心に論を展開したい。

摘要

本論文以活跃于日本文学，文化中的“梅莺组合”为研究对象进行考察。

深深植根于日本人的审美观中的“梅莺组合”被认为是来源于中国古典诗歌，自从其在和歌中登场以来，便深受日本人喜爱，并从文学融入了民俗，从贵族社会进入了民间，成为了日本具有代表性的景物组合。

另一方面，中国文学中虽然也有花鸟诗，但诗中却鲜见“梅”与“莺”的固定组合。不过中国民间有梅花与喜鹊的组合，常出现在年画与器物上，寓意吉祥。

本论文将针对日本“梅莺组合”的形成，发展，演变过程进行考察，并结合中国诗中的情况进行对比分析。

キーワード: 梅にウグイス 取り合わせ 美意識

关键词: 梅莺 景物组合 审美观

和歌において植物と動物の取り合わせは、鶴に松、鶯に梅、時鳥に橘、雁に紅葉など多くみられる。本稿は、文学に広く知られるだけでなく、日本人の実生活の中でも根付いている「梅に鶯」の取り合わせについて考察していきたい。

「梅に鶯」は、慣用句として現代日本語に定着し、同じ季節内で似合うものの、取り合わせが良い二つのもの、美しく調和して絵になるもの、というような譬えである。また、花鳥風月の典型として、着物の模様、焼物の図柄、花札など、今日の日本人の生活の中で身近に見られる。この日本人の美意識の中で深く根付いている取り合わせは、実は和歌から来ているのである。

「梅に鶯」を詠む和歌について、すでに日本の学者の論考が見られる。鈴木宏子氏が「『梅と鶯の組合せ』について——『古今集』四季歌の表現」において、『万葉集』と『古今和歌集』における「梅に鶯」歌の類型、発想、詠む技巧などを分析し、万葉集から古今集への四季歌の表現の変容を考察した⁽¹⁾。また、笹川博司氏は「『梅に鶯』考」において、『万葉集』から八代集に見える「梅に鶯」の歌を考察し、その発展の傾向を指摘した⁽²⁾。

「梅に鶯」の発想は漢詩から来ていることはすでに多くの学者たちによって指摘されている。しかし、漢詩には果たして「梅に鶯」という定型的な表現が存在するのか。その問題についての論考はまだ見当たらないようである。

本論は、両氏の研究成果を参照しながら、和歌における「梅に鶯」の取り合わせの成立と発展、及びそれと漢詩との関連性について論を展開したい。

1 『万葉集』に見える「梅に鶯」

(1) 花鳥詩の影響

鈴木宏子氏は、和歌における景物の組み合わせは「原則として、季を同じくする景物の間で成り立つものである」と指摘した。梅と鶯はともに早春の景物である。梅は春に「まず咲く花」(万葉・巻5・818、憶良歌)と認識され、鶯も、

うぐひすの 谷よりいづる 声なくは はるくることを 誰かしらまし
大江千里(古今・春上・14)

(1) 鈴木宏子「『梅と鶯の組合せ』について——『古今集』四季歌の表現」、『中古文学』45、1990年6月。以下、鈴木氏の論文はこれによる。

(2) 笹川博司「『梅に鶯』考」、『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』11、1998年3月。以下、笹川氏の論文はこれによる。

と詠まれるように、春を告げる使者と見なされている。同じく早春の風物として、両者がともに詠まれるようになったのもごく自然であろう。

日本文学で最初に梅を詠む作品——『懷風藻』に見える葛野王の「春日翫鶯梅」に「素梅開素靨、嬌鶯弄嬌声」という句があり、すでに梅と鶯の取り合わせが登場している。平安朝の漢詩にも、

鶯鳴梅院暖 花落舞春風

(嵯峨天皇御製「梅花落」、『文華秀麗集』春)

待蝶香猶富 藏鶯影未寛

(桑腹赤「和野内史留後看殿前梅之作」、『文華秀麗集』春)

など、梅と鶯を共に詠じる例が見られる。それはいわゆる漢詩の「花鳥詩」の伝統を受け継いで生じた組み合わせであると井手至氏が指摘した⁽³⁾。

「花鳥詩」とは、漢詩における花と鳥をともに詠じる類型の詩である。その伝統は六朝詩にすでに見られ、

落花猶未捲 時鳥故余声

(梁・何遜「春暮喜晴酬袁戸曹苦雨詩」、梁詩卷9)

浴鳥沈還戲 飄花度不歸

(陳・江總「春日」、陳詩卷8)

などの例が見られる。初唐になると、詩文に見える花鳥の取り合わせも盛んに詠まれている。

煙霞交隱映 花鳥自參差

(唐太宗「帝京篇」其五、『全唐詩』1-1)

遲日園林悲昔遊 今春花鳥作邊愁

(唐・杜審言「渡湘江」、『全唐詩』62-38)

「花鳥」の詩語が頻出している。青木正児氏の論考によれば、それは六朝

(3) 井手至「花鳥歌の源流」『万葉集研究(二)』(塙書房、昭和49年)

時代に起こった花鳥画が初唐に盛んになっているからであるという⁽⁴⁾。

大陸の詩風に大きく影響された日本の上代人の漢詩集には、花鳥詩も多く見られる。梅に鶯の取り合わせはその一例に過ぎない。ほかに花に鳥、花に鶯、鶯に桃などの例も見られることは、井手至氏の「花鳥歌の源流」に詳しい（井出氏前掲書）。

(2) 『万葉集』に見える「梅に鶯」

そして『万葉集』になると、花鳥歌の代表として、「梅に鶯」を詠んだ歌が十三首現れた。以下のごとくである⁽⁵⁾。

- ① 梅の花 散らまく惜しみ 我が園の 竹の林に うぐひす鳴くも
少監阿氏奥島（巻5・824）
- ② 春されば 木末隠りて うぐひすそ 鳴きて去ぬなる 梅が下枝に
少典山氏若麻呂（巻5・827）
- ③ 春の野に 鳴くやうぐひす なつけむと 我が家の園に 梅が花咲く
算師志氏大道（巻5・837）
- ④ 梅の花 散り紛ひたる 岡辺には うぐひす鳴くも 春かたまけて
大隅目楨氏鉢麻呂（巻5・838）
- ⑤ うぐひすの 音聞くなへに 梅の花 我が家の園に 咲きて散る見ゆ
対馬目高氏老（巻5・841）
- ⑥ 我がやどの 梅の下枝に 遊びつつ うぐひす鳴くも 散らまく惜しみ
薩摩目高氏海人（巻5・842）
- ⑦ うぐひすの 待ちかてにせし 梅が花 散らずありこそ 思ふ児がため
筑前掾門氏石足（巻5・845）
- ⑧ 梅の花 咲ける岡辺に 家居れば 乏しくもあらず うぐひすの声
作者未詳（巻10・1820）
- ⑨ 梅が枝に 鳴きて移ろふ うぐひすの 羽白たへに 沫雪そ降る
作者未詳（巻10・1840）

(4) 青木正児「支那人の自然観」、『青木正児全集』巻2（春秋社、1969年）、582—583頁

(5) 『万葉集』の本文は、小島憲之ら校注『万葉集』（新編日本古典文学全集、小学館、1994年）による。
なお、『万葉集』における「花鳥歌」は、「梅に鶯」のほかに「ほととぎすに橘」（巻18・4092、巻19・4166など）も多く見られるが、井手至氏によると、それも漢詩文的な発想に影響を受けた可能性があるという。

⑩ 花を詠む

うぐひすの 木伝ふ梅の うつろへば 桜の花の 時かたまけぬ

作者未詳（巻 10・1854）

⑪ いっしかも この夜の明けむ うぐひすの 木伝ひ散らす 梅の花見む

作者未詳（巻 10・1873）

⑫ 袖垂れて いざ我が苑に うぐひすの 木伝ひ散らす 梅の花見に

藤原永手（巻 19・4277）

⑬ うぐひすの 鳴きし垣内に にほへりし 梅この雪に うつろふらむか

作者未詳（巻 19・4287）

この 13 首の歌は「限られた巻、あるいは限られた詠歌の場に集中しているということとともに、いずれも写生もしくは述懐の歌である」と指摘されている⁽⁶⁾。そこで、鈴木、笹川両氏の論を参考しながら、『万葉集』に見える「梅に鶯」の歌の類型を簡単にまとめてみたい。

この 13 首の中で、巻 5 の「梅花の宴」で詠まれたものは①～⑦の 7 首であり、巻 10 の「鳥を詠める」「雪を詠める」に各 1 首、「花を詠める」2 首、巻 19 にも 2 首が見られる。

この 13 首の歌を分類すると、鈴木氏によれば、（一）梅の枝に鶯がとまる、あるいは、とまって鳴く、（二）梅を見る者の耳に鶯の囀りが聴こえる、（三）梅花の散ることを惜しんで鶯が鳴くという三つの類型に分けられる。しかし筆者は、鈴木氏の分類は鶯を中心とする考え方であり、そのほかにも鶯が梅の枝に隠されるとか、鶯が梅花を散らすなどの類型が存在すると思われる。ここで、筆者は角度を改め、「梅と鶯の関係」を中心に、それらの歌を 2 種類に分けてみた。

I 類は、梅と鶯が同一の構図に「現れる」歌である。梅の枝に鶯がとまって鳴くとか、梅とともに春を告げるとか、花鳥画のような静態的なもので、相互関係が見えないものを指している。それに対して II 類は、梅と鶯が「相互関係」をもつものである。鶯が梅の花を散らしたり、惜しんだりして、つまりなんらか動作によって両者が結び付けられ、互いに「影響」しあうものである。

『万葉集』における 13 首の「梅に鶯」の歌の中で、I 類に属するものは、

(6) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』(上) (講談社、1998 年) 32 番歌の「鑑賞と評論」、444—445 頁

②の鶯が梅の下枝に隠される、③、⑧の鶯が梅の枝止まって鳴く、④の梅の花が散り乱れる岡に鶯が鳴く、⑤鶯の声が聞こえる折りに、梅の花が咲いて散る、⑨、⑩の鶯が「木伝」って鳴く、⑬の鶯が鳴いている垣内には、梅の花が咲いているか、雪で散ってしまうか、という8首である。

Ⅱ類に属するのは、①、⑥の鶯が梅の散るのを惜しむ、⑦の梅が散らないように祈る、⑪、⑫番の鶯が「木伝」って梅の花を散らす、という5首である。

どうしてこのような分類方法を用いたかということ、文学における景物の組み合わせは、同じ季節の風物だけでは成り立たないと考えているからである。もちろん同じ季節の景物が自然に詠み込まれる例も多いが、景物のイメージの変化によって解体していく組み合わせもある。鈴木氏が、「景物相互間に何らかの引力が働く必要があるのではないか」と指摘する通りである。

すると、梅と鶯の間に「引力」のようなものは、「花を散らす」や「花の散るのを惜しむ」といったような擬人化的な感情ではないかと考えられる。花が散ることに対する哀惜の気持ちは、歌人の心そのままを反映している。自然物に歌人の心を託すことは、自然物の間を結びつく糸のようなものと考ええる。

2 平安和歌における「梅に鶯」の変容

『万葉集』に多く見える「梅に鶯」の歌は、平安朝になっても詠み続けられている。『古今和歌集』の仮名序に「花に鳴く鶯」、「花をめて鳥をうらやみ」などの表現が見られ、花と鳥の取り合わせが和歌に多く用いられることを裏付けている。中でもとくに「梅に鶯が、和歌の代表的な景物の一つとなっている。

片桐洋一氏は『歌枕歌ことば辞典』の「鶯」条で、

平安時代に入ると、例外は幾つかあるけれども、ほとんどすべては「梅の花」とともによまれ、配列からみて桜かと思われるものについても、たとえば「鶯の鳴く野辺ごとに来て見ればうつろふ花に風ぞ吹きける」（古今集・春下・読人不知）「花の散ることやわびしき春霞たつたの山の鶯の声」（同・後蔭）のように「桜」という語を使わず「花」という語を使っ

ている。「梅」以外の具体的な花の名が「鶯」にはふさわしくなかったのである⁽⁷⁾。

と述べ、鶯は梅以外の花と結びつきにくいと指摘した。「梅に鶯」の取り合わせは、平安朝の和歌においてさらに定着していることがわかる。

しかし、『古今和歌集』に詠まれる「鶯梅歌」は、『万葉集』に比べればすでに大きな変容が見られるようになった。梅と鶯を共に詠じる歌は、『古今和歌集』に6首見える。春歌3首、恋歌1首、俳諧歌1首、神遊歌1首である。

⑭ 梅がえに きゐるうぐひす 春かけて なけどもいまだ 雪はふりつつ
詠み人しらず (春上・5)

⑮ 折りつれば 袖こそにほへ 梅花 ありとやここに うぐひすのなく
詠み人しらず (春上・32)

⑯ うぐひすの 笠に縫ふてふ 梅花 折てかざさむ 老かくるやと
東三条左大臣 (春上・36)

⑰ わがそのの 梅のほつえに うぐひすの ねになきぬべき こひもする哉
詠み人しらず (恋・498)

⑱ 梅の花 見にこそ來つれ うぐひすの ひとくひとくと 厭ひしもをる
詠み人しらず (俳諧・1011)

⑲ 返し物の歌

青柳を 片糸によりて うぐひすの 縫ふてふ笠は 梅のはながさ
詠み人しらず (神遊び・1081)

この歌数が多いか少ないかは単純には判断しにくいかもしれないが、内容を見てみると、のちに触れる「梅花の笠」を題材として詠む⑯、⑲の2首以外、⑭の梅の枝に来て宿っている鶯が鳴く、⑰の鶯が梅の末枝に鳴いているのは自分が恋に悩まされ泣いているようである、⑱の梅を見る客に、鶯が「ひとくひとく」(人来)といやそうに鳴いているとユーモアに詠んでいる、⑮の梅の香を恋人の薫りと間違えて鶯が袖に鳴く、といった4首の歌は、すべて前述のⅠ類に属するものである。つまり、梅と鶯を媒介として、春の景色や恋の情緒を表現しているが、梅と鶯の間の関連性が薄くなっていると考え

(7) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』(角川書店、1983年)

さて、⑩⑪の「梅の花笠」を詠む2首に用いられる「てふ」——「という」の表現に注目してみると、「鶯が梅の花を笠に縫う」という発想が、当時すでに一般的に知られていることであつたと考えられる。そして⑩は⑪の催馬楽を踏まえて作られたと思われる。⑪は「神遊び」の歌である。神遊びの歌の多くは神楽歌だが、天皇即位の時に行う大嘗祭に、諸国を代表し、卜定あれて奉仕する「御嘗」（おほむべ）の歌を主とする。1081歌は、梅の花笠を採って舞う歌と思われる⁽⁸⁾。

詞書の「返し物の歌」について、一条兼良が「古今集童蒙抄」において、

催馬楽の律にうたなり。源氏物語に、かへり声にあを柳うたふといへり。律の声をかへりごゑといへばかへしものおなじ事也。（中略）催馬楽の調子に琴も笠もしらぶるをいふなるべし。催馬楽の呂は双調、律は平調なり。呂律の間いづれにかへすといふ事⁽⁹⁾。

と記しているように、返し物というのは、催馬楽において呂から律へ旋法を転じたり、基調音を移す（転調）のことを言う。つまり、1081歌は、源氏物語にも登場する催馬楽「青柳」から生じたものである。

小西甚一氏は、

楽曲としての催馬楽は、奈良時代の末あるいは平安時代の初めから延喜ごろまでのおよそ百年あまりの間に、創始され、発達し、完成されたわけだが、それは、雅楽ふうの楽曲としての催馬楽についてであって、もともとなった民謡は、ずっと古いものだと認められる。

と指摘している⁽¹⁰⁾。よって、⑩歌の作者源常（812～854）が歌を詠んだ頃、すでに催馬楽「青柳」が流布し享受されていたと推測できる。要するに、⑩⑪の2首はともに催馬楽「青柳」を踏まえて作られたものである。

また、古今集において、「梅に鶯」を詠む6首の歌はすべて「詠み人知らず」の作品であると笹川氏が指摘した。さらに同氏の論考によると、それは「梅」と「鶯」の取り合わせが、古今集が編纂された905年の時点から、「少

(8) 岩波書店古典文学大系『古今和歌集』1081歌の注釈を参照。

(9) 本文は、『群書類従』16、「和歌部」『古今集童蒙抄』による。

(10) 土橋寛、小西甚一校注、岩波大系『古代歌謡集』（1980年）296頁、「催馬楽」の解説より。

なくとも 50 年以上昔に流行していた取り合わせであって、撰者たちを含めた当時の歌人たちには、あまり取り上げる気にならないものとなってしまうていたのではないかと指摘した。

その証拠として、古今集以降の勅撰和歌集を調査すると、梅と鶯を共詠する歌は、意外と少ないことがわかる。

『後撰集』から『新古今和歌集』までの 7 つの勅撰和歌集に、梅と鶯を共に詠じる歌は、後撰集 1 首、後拾遺集 1 首、金葉集 1 首、千載集 4 首、新古今集 2 首で、後拾遺集と詞花集には見えない。

さらに、それらの歌の内容を見てみると、やはり「花を惜しむ」（後撰・春上・40）「花を散らす」（拾遺・春上・28、千載・春上・17）などの常套表現が多く見られる。唯一新しいのは、

梅が枝の 花に木伝ふ 鶯の 声さへ匂ふ 春の曙

仁和寺法親王守覚（千載・春上・28）

の歌のみである。梅の香に対する愛好と新古今時代の美意識を結びつけ、鶯の声さえ匂っていると詠んでいるが、それも鶯が梅の香に誘われるという古今集の発想から来ている。

要するに、古今集以降の勅撰和歌集に、「梅に鶯」という組み合わせはしだいに廃れていくと言えよう。その原因について、漢詩文から取り入れた梅と鶯の取り合わせは、平安時代になるとすでに新鮮度を失ってしまったことが考えられる。また、笹川氏によると、最初に梅に鶯を詠んだのは、漢詩文の影響であったが、後の平安朝の和歌では、梅の香を詠むのが主流となっていた。平安朝の奥の細道の世界が、従来の鶯が梅の枝にとまるという視覚的な側面やその鳴き声という聴覚的な側面とうまく結びつくことが難しくなっていたことにより、「梅に鶯」の取り合わせが減少したと指摘している。これも「鶯梅歌」の衰退の原因として考えられる。

3 民間に定着

前述のように、梅に鶯という組み合わせは、『万葉集』に多く詠まれ、8 世紀後半から 9 世紀前半の漢風讃美時代の産物と考えられる。和歌の中では、

しだいに「梅に鶯」の取り合わせが廃れてゆくが、一方で日本人の美意識に根付き、今日まで伝わってきた。

それは、「梅に鶯」を取り上げる催馬楽などの文芸様式と大きくかかわっていると思われる。催馬楽「青柳」、「梅が枝」などと「梅に鶯」との関係はすでに述べた。それに、「梅に鶯」に関する故事、伝承もその取り合わせの定着に大きく寄与している。

江戸時代の随筆『世事百談』には、

梅に鶯をよめること、和歌には常のことなり、鶯宿梅の故事、拾遺和歌集に見えたるより、猶さらなべて世人も鶯といへば、梅はかならずあるべきものとしもおもへり⁽¹¹⁾

という記述から、「鶯宿梅」の故事は「梅に鶯」の組み合わせに成り立つに大きく関与していることが窺えよう。

鶯宿梅の話は「拾遺和歌集」雑下の和歌に初出する。

内より人の家に侍ける紅梅を掘らせ給けるに、鶯の巣くひて侍ければ、家主の女まづかく奏せさせ侍ける

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ

かく奏せさせければ、掘らずなりにけり（拾遺和歌集・雑下・251）

詞書の内容をまとめてみると、村上天皇の天暦年間（947—956）に御所清涼殿の梅が枯れてしまったので、代わりの梅を探され、西ノ京・紀貫之の娘（紀内侍）の屋敷の梅が名梅なので、勅命により御所に移されることとなった。娘は、別れを惜しみ短冊に、「勅なれば」の歌を書いたため、梅の枝に掛けて贈った。この歌が村上天皇の目にとまり、娘を憐れまれて、元の庭に返したという。このことにより「鶯宿梅」または「軒の紅梅」と称せられるようになった。ちなみに、現在では、この話を基に鶯宿梅という梅の品種も作られている。なお、この話は「大鏡」にも載っている。

この逸話が流行り出したのち、梅の木に鶯の巣が作られるという和歌がしばしば見られるようになった。

(11) 山田美成著『世事百談』、『日本随筆大成』第1期第9巻。

うぐひすの 巢作る枝を 折つれば こうばいいかでか 生まむとすらん
よみ人知らず（拾遺・物名・354）

時代が下り、鶯宿梅の逸話は、さまざまな書物の伝承によって、時代を通じて広く知られるようになった。菅原利晃氏の考察によると、「鶯宿梅」の故事を引用する日本の古典書物は30余種あり、歌集、歴史物語、歌論書、説話集、辞書、謡曲、教訓書、地誌、案内書などあらゆるジャンルにわたっている⁽¹²⁾。その説話の伝承関係について、菅原氏は、『拾遺和歌集』系、『大鏡』系、『下学集』系、謡曲系や別系統二種に分けている。それぞれの系統は、時代や主人公などについて違うところがあるが、いずれもこの説話の別伝として広く流布している。

とくにこの「鶯宿梅」の話は、能や謡曲、歌舞伎などの曲芸にしばしば登場している。一例をあげると、梶原源太景季を主人公とする能「箴」に、

御身他生の縁ありて。一樹の蔭の花の緑に。鶯宿梅の木のもとに。宿らせ給へわれはまた世を鶯の埒はこの花よとて失せにけりこの花よとてぞ失せにける

とある。

そして、「梅に鶯」という言葉の初出も、浄瑠璃のセリフの中とされる。1710年頃初演の浄瑠璃「お染久松 袂の白しぼり」に下記のようなくだりがある。

柳櫻に松楓。梅に鶯 紅葉に鹿。竹に雀や花に蝶。籬（ませ）の八重菊 葛かづら。桐に鳳凰 獅子に牡丹扇ながし砂ながし蟲づくし草づくし。

「梅に鶯」のほか、「紅葉に鹿」、「桐に鳳凰」などの、花札の絵柄と一致する言い回しが既にできあがっている。こうしてみると、花札の絵柄によって、「梅に鶯」の取り合わせが民間に定着することに大いに影響を与えたと思われる⁽¹³⁾。

(12) 菅原利晃「紀貫之の娘『鶯宿梅』説話小考」、(札幌国語研究)八。

(13) ウェブサイト「ウグイス考」http://www.hegurinosato.sakura.ne.jp/tori_hm/uguisu_hanafuda.htm

花札とは、花合わせに用いるカルタのことである。天正年間（1573～1592）にオランダの水夫によって長崎に伝えられた「うんすんかるた」がしだいに変化して、江戸末期のころ現在の形となり、普及したものである。1～12月にそれぞれ12の草木を当てて描き、おのおの四枚ずつに点数・価値を決めて計48枚の札にしたものである。その中で、「梅に鶯」があり、鶯が紅梅の枝に止まっている絵柄が描かれている。

ちなみに、近代に至っても、明治、大正時代の小学校唱歌集に「三才女」という歌が収録され、その冒頭は、

色香も深き紅梅の
枝にむすびて
勅なればいともかしこし
鶯の間はば如何にと
雲みまで聞えあげたる言の葉は⁽¹⁴⁾

鶯宿梅の故事の主人公を平安時代の三才女の一人として褒め称えている。それは鶯宿梅の故事は近代まで広く伝わっていることを裏付けている。

春の風物である梅と鶯の取り合わせは、最初に漢詩の発想を受けて和歌に取り入れられたが、のちにしだいに和歌文学から姿を消していく。しかし、楽曲、故事伝承、曲芸、ないし花札など民間娯楽によって、日本人の生活と融合し、日本の伝統的な美意識として定着したのである。

4 漢詩に見える梅と鶯

では、漢詩に「梅に鶯」という組み合わせは存在しているのか。この問題に入る前に、まず中国の鶯が日本のウグイスと違う鳥を指すことを明確しなければならない。

中国の鶯は、日本では「コウライウグイス」といい、黄鸝、黄鶯、黄鳥などの別名があり、日本で一般的に知られているウグイスとは無縁の鳥である。春になると大きな声で囀る点は共通するものの、色も大きさもウグイスと異

(14) 木村正明「唱歌における『梅』」、梅花女子大学日本文学科編『梅の文化誌』（和泉選書、2001年）

なる⁽¹⁵⁾。

ウグイスに「鶯」の字を当てたいきさはわからないが、おそらく漢詩に詠まれる「黄鸝」の鳴き声によって、同じく春に鳴くウグイスを想定したのであろう。

前述のように、漢詩には花鳥を共詠する伝統がある。その伝統の影響で、梅と「鳥」とが対句になって詠まれた例が歴代の漢詩に多く見られる。

春情寄柳色 鳥語出梅中 (梁・蕭子範「春望古意詩」、梁詩卷 19)

昨日看梅樹 新花已自生 今旦聞春鳥 何啻兩三声……

(梁・簡文帝蕭綱「春日看梅花詩」、梁詩卷 22)

磬音藏葉鳥 雪艷照潭梅

(唐・杜牧「題茶山(在宜興)」、『全唐詩』卷 522-37)

このように漠然と「鳥」をいう例も多く見られるが、具体的に鳥の名前を挙げる場合もある。鶯もその中の一つである。梅と鶯は、同じく春の景物として漢詩に詠じられる例が六朝時代から現れ、歴代の詩に見える。

新鶯隱叶嚀 新燕向窗飛 柳絮時衣酒 梅花乍入衣

(梁・蕭繹「和劉上黃春日詩」)

春景嬌春台 新露泣新梅 春葉參差吐 新花重疊開

花影飛鶯去 歌声度鳥來 倩看飄飄雪 何如舞袖回

(唐・謝偃「踏歌詞三首」之一、『全唐詩』卷 38-16)

忽聞鶯響谷 于此命相知 正開彭澤酒 來向高陽池

柳叶風前弱 梅花影處危 賞洽林亭晚 落照下參差

(唐・高瑾「晦日重宴」、『全唐詩』卷 72-18)

款款春風澹澹云 柳枝低作翠攏裙 梅含鷄舌兼紅氣 江弄瓊花散綠紋

帶霧山鶯啼尚小 穿沙芦笋葉才分 今朝何事偏相覓 撩亂芳情最是君

(唐・元稹「早春尋李校書」、『全唐詩』卷 413-19)

(15)『大漢和辭典』の「鶯」条に、「かうらいうぐひす……形は普通のうぐひすよりも大きく、体は黄色で羽及び尾は黄黒相まじる。」と説明し、ウグイスと別種であることは明らかである。また、小林祥次郎の『梅と日本人』にも「鶯」の付章が設けられ、詳しく論じている。

しかし、これらは春の景色を描写する際に、鶯が鳴いて、梅と柳が芽生える情景を詠んでいたり、鶯の鳴き声を聞いて、春の興を覚え、宴会を開いたりするのを詠むものにすぎなく、梅と鶯の間の相互関係は見られない。

もっとも、『万葉集』の「梅に鶯」歌の出典と指摘される隋代の江総の「梅花密処藏嬌鶯」⁽¹⁶⁾（「梅花落」）や王維の「紫梅發初遍、黃鳥歌猶澀」（「早春行」）などの例も見られる⁽¹⁷⁾。しかし筆者の調査によると、六朝と唐詩において、直接に梅花を鶯と結びつける例はさほど多くない。

ちなみに、同じ春の鳥として、燕と梅を組み合わせて詠まれる例も少なくない。鶯に比べると、燕は鳴き声が劣っているが、きれいな姿が中国の文人に愛され、しばしば詩に詠まれている。たとえば、陳代徐陵の「梅花落」では、

対戸一株梅 新花落故栽 燕拾還蓮井 風吹上鏡台……（陳詩卷五）

というように詠まれる。燕が落梅の花を拾うという発想は、和歌における「鳥が花を惜しむ」発想と類似しているのではないか。また、

家空歸海燕 人老發江梅（劉長卿「酬秦系」、『全唐詩』卷 147-55）
玉戸看早梅 雕梁數飛燕（戴叔倫「獨不見」、『全唐詩』卷 273-1）
遠來同社燕 不見早梅花（劉禹錫「傷獨孤舍人」、『全唐詩』卷 364-22）

など、燕と梅の組み合わせも見られる。

さらに、鶯が燕とともに梅や柳などの春の景物と組み合わせて詠まれる詩句もある。

寒雪梅中盡 春風柳上還 宮鶯嬌欲醉 檐燕語還飛……

（李白「宮中行樂詞八首」之七、『全唐詩』卷 164-34）

只道梅花發 那知柳亦新 枝枝綵到地 葉葉自開春

紫燕時翻翼 黃鸝不露身 漢南應老盡 霸上遠愁人

（杜甫「柳邊」、『全唐詩』卷 234-26）

(16)『芸文類聚』は「梅花隱處隱嬌鶯」に作る。

(17)ほかに、「黃鳥銜櫻梅」（南朝宋・鮑照「三日」）、「新鶯隱葉囀」（梁・蕭繹「和劉上黃」）など、梅と鶯を詠む漢詩があると指摘されている（岩波新大系、824、827 歌の注釈）

また、稀ではあるが、鳩や翡翠（カワセミ）、雁なども春を代表する鳥として、梅と共に詠まれたりしている。

春鳩報春鳩 苦寒生暗風……梅柳意却活 園圃冰始融……

（唐・盧仝「酬願公雪中見寄」、『全唐詩』卷 389—4）

最怜双翡翠 飛入小梅叢

（唐・元稹「生春二十首」之十一、『全唐詩』卷 410—21）

聽鳥聞歸雁 看花識早梅

（唐・暢諸「早春」、『全唐詩』卷 287—16）

そのほか、寺や道観に植える梅は、よく神仙道と結びつき、その場合は、よく鶴と対をなして登場する。

花分梅嶺色 塵減玉階寒 遠称栖松鶴 高宜点露盤

（唐・施肩吾「早春殘雪」、『全唐詩』卷 494—10）

鶴老難知歳 梅寒未作花

（唐・劉長卿「尋洪尊師不遇」、『全唐詩』卷 147—39）

しかし、筆者の調査によると、漢詩における梅と動物の取り合わせは、いずれも梅との間の関連性が薄く、和歌における「梅に鶯」のような典型的な組み合わせは成り立たなかったと思われる。

さらに、このような春の景物の組み合わせは、六朝や唐詩に多く見られるが、梅の品格を褒め称える宋詩になると、急に減少した。宋詩の中には、「淺顰常鄙桃李学、独立不容鶯蝶覩」（陸游「西郊尋梅」）のように、梅は俗っぽい桃や李、鶯や蝶などを相手にしないという捉え方もある。時代が下っていくほど、漢詩における梅と鶯のイメージもしだいに離れていくのである。

5 中国の民俗における「梅に鶯」

一方、日本の「梅に鶯」に類似する取り合わせは中国の詩文には存在しないものの、民間では「梅に鶯（カササギ）」という取り合わせが広く知られている。

中国では、絵画や器物の模様として、梅と共に描かれているのは鵲が多い。鵲は中国語で「喜鵲」と呼ばれているため、喜びを呼ぶ、吉祥を告げる縁起のいい鳥として親しまれている。中国人は、鵲が枝に止まっているのを見たり、その鳴き声を聞いたりすると、それを喜ばしいことが起こる前兆と考えられている。

中国歴代の文人も鵲を吉祥の象徴として詩に詠んできた。

欲避新枝滑 還向故巢飛 今朝聽声喜 家信必應歸

(梁・蕭紀「詠鵲」、梁詩卷十九)

又如鵲報喜 轉作猿啼苦

(唐・白居易「秦中吟十首・五弦」『全唐詩』卷 425-9)

鵲報主人知有喜 惠然金玉総称難

(南宋・曹彦約「伯量同二弟欲見訪湖庄以詩告至褒拂過情輒次其韵」、『全宋詩』卷 2731)

そして、漢詩に鵲と梅を共詠する例も見られる。

双鵲飛来噪午晴 一枝梅影向窗横

(南宋・陸游「雪後尋梅偶得絶句十首」之五、『全宋詩』卷 2241)

しかし、これらは漢詩においてはまれな例であり、あくまでも個人の愛好を反映し、一般的な好尚を代表するものではないと考えられる。

一方、民間では、吉祥を予兆する鵲と春を告げる梅は縁起のいいもの同士として、よく絵画や器物の模様に、組み合わせて登場している。

「梅に鵲」の代表的な絵柄を紹介すると、鵲が梅の枝に止まる絵柄を「喜上眉梢」⁽¹⁸⁾と称し、吉祥のモチーフとして、絵画や器物の文様に取り入れられている。また、「喜報春先」(喜びは春先に)には、鵲が梅の枝に止まって頭を上げて鳴いている様子が描かれており、人々が喜びに出会った時の幸せな気持ちを表している。そのほかにも、「梅鵲争春」、「喜鵲登梅」などの紋様がよくお正月の飾りとして用いられている。(図二)

(18)「眉」は中国語で「梅」と同音である。



図二（上）喜鵲登梅図



（下）紅双喜図

梅と鵲とが生き生きと描かれたこれらの絵には、吉祥、幸福を願う人々の気持ちが表現されている。お正月の飾りとしての年画や、結婚式の時貼るポスターとしてよく使われている。また、めでたい図案として、書画や家具、器物に広く使われ、喜びの意を表してきたのである。

以上論じてきたように、日本人の美意識に深く根付いた「梅に鶯」の取り合わせは、『万葉集』の歌にすでに現れている。それは漢詩の花鳥詩の影響で作られたものと指摘されているが、和歌の世界において、日本人の美意識と結びつき、日本的な取り合わせとなっている。しかし、平安朝になると、和歌では梅の香が重視されるようになり、梅に鶯の取り合わせも新鮮感を失ってしまったため次第に廃れていったが、催馬楽などによって民間へと普及していく。また、鶯宿梅の故事によって、梅に鶯はさらにさまざまな分野に浸透していく。現代になっても、「梅に鶯」は取り合わせの良いものの代表として日本中で広く知られている。

一方、漢詩には花と鳥を組み合わせる伝統があるが、とくに梅を鶯と結びつける傾向は見当たらない。梅は鶯、燕、雁、鶴などと共に詠まれるが、定着した取り合わせまで発展していないと思われる。ただし、民間においては、「梅に鶯」に似た取り合わせとして、「梅に鵲」が見られる。吉祥を願う意味をこめるこの取り合わせは、絵画や器物の模様として、お正月の飾りや結婚式の飾り物として、頻繁に使われている。

要するに、「梅に鶯」はもともと漢詩から来たものであるが、和歌に定着して以来、日本人に親しまれてきた。そして、文学から民俗、貴族社会から

民間という発展を経てしだいに文学の世界から離脱し、日本独自の美意識を表現する代表的な絵柄になっていると考えられるのである。